



寺子屋は、いつできたの



町人や農民の子どもが、学ぶことだけを目的にお寺に入るようになった、室町時代末期だよ。

室町時代末期から、町人・農民の子どもが増えた

平安時代のお寺では、僧そうになることをめざす子どもたちが、学んでいました。鎌倉時代かまくらじだいに入ると、学ぶことだけを目的として、お寺に入る子どもが現れました。初めは身分の高い武士の子どもが中心でしたが、室町時代末期（16世紀前半）になると、身分の高くない武士や、町人・農民の子どもも増えてきました。これが、寺子屋の始まり、と見られています。当時は、自宅から通学させるところはまれで、ほとんどの場合、お寺に子どもを寝泊ねとまりさせていました。江戸時代に、生徒を「寺子」、寺子が学ぶ場所を「寺子屋」、寺子屋への入学を「寺入り」とよんだのは、ここからきています。

江戸時代の中ごろから広まった

寺子屋が広まったのは、江戸時代の中ごろ（18世紀前半）からのようです。先生は、学問がある一般の人、武士、僧、医者、神官などで、自宅の一部を教室にして、おもに初歩的な「読み・書き・そろばん」、つまり読書・手習い・算数を教えていました。この場合の手習いは、商売上の書類・帳面・手紙の書き方など、仕事や生活に必要な文字・文書になれて、上手になることをめざした、実用的なものでした。江戸・京都・大阪のような大都市では、女の子も多かったので、お茶・お花・裁縫さいほうなども教えていました。

生徒は7～13歳さいくらいで、午前7、8時ごろから、午後2、3時ごろまで勉強しました。一つの寺子屋の生徒数は、20～30人くらいです。19世紀に入ると、大都市の寺子屋は200～300人がふつうで、500人をこえる大規模だいきぼなものもあったそうです。